参考資料１

市町ヒアリング結果要旨

（途中経過報告）

2019.12.19 ビジョン課

１　趣旨

新ビジョン検討の基礎資料とするため、県内全市町（企画担当課）の聞き取り調査を実施。新ビジョン策定への参画依頼を行うほか、新しい将来推計人口の結果を説明し、近年の人口の動き、政策の方向性と主な課題、将来展望について意見交換を行った。

２　ヒアリング日程

地域	市町名	主担当課	訪問日		要録頁
神戸	神戸市	企画調整局企画課	11月15日	……	5
阪神南	尼崎市				
	西宮市				
	芦屋市				
阪神北	伊丹市				
	宝塚市				
	川西市				
	三田市				
	猪名川町				
東播磨	明石市				
	加古川市				
	高砂市				
	稲美町				
	播磨町				
北播磨	西脇市	都市経営部次世代創生課	12月3日	……	7
	三木市				
	小野市				
	加西市	ふるさと創造部人口増政策課	12月3日	……	9
	加東市	まちづくり政策部企画政策課	12月3日	……	11
	多可町				
中播磨	姫路市				
	市川町				
	福崎町				
	神河町				
西播磨	相生市				
	赤穂市				
	宍粟市				
	たつの市				
	太子町				
	上郡町				
	佐用町				
但馬	豊岡市	政策調整部政策調整課	11月27日	……	13
	養父市	企画総務部企画政策課	11月28日	……	15
	朝来市	市長公室総合政策課	11月28日	……	17
	香美町	企画課	11月27日	……	19
	新温泉町	企画課	11月27日	……	21
丹波	丹波篠山市	企画総務部創造都市課	11月28日	……	23
	丹波市	企画総務部総合政策課	11月28日	……	25
淡路	洲本市	企画情報部企画課	11月26日	……	27
	南あわじ市	総務企画部ふるさと創生課	11月26日	……	29
	淡路市	企画情報部まちづくり政策課	11月26日	……	31

３　主な意見と検討課題

(1) 新しい自治の仕組み

○　旧村単位の自治協議会の立ち上げを進めている。自治会は世帯主が構成員だが、自治協議会は個人会員方式。危機意識の高い地域では、若い人が入ってくれているが、「若い者が生意気を」という人もいて、なかなか難しいところもある。(西脇市)

○　自治機能の維持が困難化。自治会の統合や自治協議会というハコ作りをしてきたが、器を変えるだけでは限界がある。仕組みを変えないといけない。(丹波篠山市)

○　自治組織の見直しが必要。地域にどういう自治機能を持たせるか、行政との役割分担、自治協議会を持続可能なものにするための方策などを議論している。(丹波市)

【検討課題】

人口減少が進み、従来型の地域コミュニティの維持がますます難しくなっていく中にあって、今後とも維持しなければならない地域コミュニティの機能は何か。また、その機能を維持するために、どのような仕組みが考えられるか。

(2) 人口の取り合い

○　近隣の市町がそれぞれ個性を出して頑張っている。近く同士で連携ではなく、他もやっているというプレッシャーの中で競争を強いられている感じ。(香美町)

○　Ｉターンは他自治体との取り合い。ICT 関係の仕事はどこでもできる。そうした仕事はたいてい小規模なので、人口を増やすという意味での効果も限定的。(養父市)

【検討課題】

各市町が人口の社会増を目指す取組を進める必要性は認めつつも、総人口が減少する中で、市町単位で人口を取り合う結果になっている現状をどう考えるべきか。中長期的な政策の方向性として、これでよいか。

(3) 人が散在することの意味

○　集落から人がいなくなると、その地域は荒れ放題になるだろう。(新温泉町)

○　小規模集落が数軒になり、やがて人がいなくなるという流れが進んでいくが、かといって一つの拠点に無理に移転させるようなことは現実的に難しい。(新温泉町)

○　人がいなくなった集落は原野に戻ってしまう。集約した方が行政コストの削減にはなるが、まばらでも人がいる方が地域の保全につながる。(養父市)

【検討課題】

多自然地域において中心部に集まる方向で人が動くことには、生活利便性の観点から必然性が認められる一方で、人がいなくなることで地域空間の質が劣化するとの指摘もある。特に問題となるケースとしてどのようなことが考えられるか。また、それを防ぐために、どのような手立てが考えられるか。

賑わいの創出や社会的コストの縮減等の観点から、一部の地域で進められているコンパクト化政策（居住地の誘導）について、どう考えるか。

(4) 子どもを増やすために

○　子育て世帯の地域間競争で、経済的支援の手厚い自治体に人が行ってしまうが、後追いで他の自治体も同じような手を打つので、結局横並びなってしまって、施策の効果が出にくくなっている。(西脇市)

○　出生対策で経済的な措置をやっても、なかなか出生増に結び付かない。毎年強く打ち出しているが、近隣市に人が流れている状況。(神戸市)

【検討課題】

子育て世帯への現金給付等の経済的支援が、出生数の増加には必ずしもつながっていない現状をどう考えるか。子どもを増やすために有効な手立ては何か。

(5) 人の流れを変える高速道路

○　高速道路が整備され、姫路、福知山、豊岡が通勤圏になっている。逆に和田山が通過点となっていく可能性がある。(朝来市)

○　今は役場周辺から鳥取中心部まで30分程度だが、6年後に高速が全線開通すれば、更に短縮される。鳥取は町内と同じという感覚になるだろう。(新温泉町)

【検討課題】

2050年の兵庫の姿をイメージする際に、人の動き方に決定的な影響を及ぼす高速道路網の整備の進捗を考慮に入れることが極めて重要。高速道路の整備は、人の流れをどのように変えるか。また、他の交通機関（鉄道等）にどのような影響を及ぼすか。

(6) 駅前再開発の威力

○　人口移動はマンション次第。中央区の人口増はマンション販売によるもの。主要な駅近に人が集まるドーナツ化現象と逆の動きが強まっており、それに対して市としてマンション規制の動きを取りつつある。(神戸市)

○　ニュータウンのリニューアルを進めて市内で人口を流動させたいが、明石や西宮などに出て行ってしまう流れが強い。神戸市内で魅力的な住宅が提供できていないということもあるが、やはり駅前再開発の吸引力が大きい。(神戸市)

【検討課題】

今後予定されている尼崎から明石にかけての駅前再開発により県内での人口移動が更に進むと考えられる。郊外住宅地や内陸部の市街地の一層の疎住化につながると考えられるが、その影響をどう見るか。また、政策的な介入を行うべきか。

（参考）阪神間で今後予定されている駅前再開発

神戸市：西神中央駅、名谷駅、垂水駅、谷上駅、鈴蘭台駅、神戸駅
芦屋市：JR芦屋駅南地区
西宮市：JR西宮駅南西地区
三田市：三田駅前Cブロック地区

(7) 若い女性が出て行くわけ

○　旧態依然としたルールを変えないと若い女性は戻ってこないが、そうした認識が低い。まず女性の賃金を上げないといけない。(西脇市)

○　産業団地の整備を進めているが、かつてほどの雇用が生まれない。若い女性も好まないだろう。女性が魅力を感じる職場を作らないといけない。(加西市)

○　法事があると男は酒を飲んで騒いでいるが、女は炊事場で料理してお酒を出す。そんな地域に誰が帰りたいと思うだろうか。そういうところを改めて、女性が生き生きと暮らせる地域を作らないと人口減少は止まらない。そこで「ジェンダーギャップの解消」を進める戦略を考えている。(豊岡市)

【検討課題】

若い女性が住み続けてもよいと思える地域を作る、上で「ジェンダーギャップの解消」が不可欠との意見がある。具体的にどのような取組が必要なのか。

また、女性を惹きつける雇用を生み出す上で、求められる施策は何か。

(8) 外国人住民への対応

○　玉ねぎの皮むき、カット野菜の出荷など農業関連の技能実習を中心に約 230 人の外国人が居住。斡旋する組合が市内にあって、民業任せの状態。災害時に外国人をきちんと案内できるのか、危機管理部門が頭を悩ませている。(南あわじ市)

○　外国人住民の増加を受けて、神戸大学と共同で実態調査中。在留資格が永住、技能実習など様々で、それらの違いがどうなっているのか、子どもがいる場合に何かハンディはないのかといったことを調べたい。(豊岡市)

○　1～3 年で入れ替わっていく。どれほど滞在するかは会社次第だが、一時的でも市民には変わりないので、気持ちよく住んでもらえるようにしないといけない。翻訳できる人材の確保や日本語学校の開設など、県の支援をお願いしたい。(加東市)

【検討課題】

数年で帰国する技能実習生、留学生を中心に全県的に外国人住民が増加している。これらの外国人住民に対して、地域はどのような関わり方をしていくべきか。また、多文化共生を進める視点から、どのような対応をすべきか。

（その前提として県内の外国人住民の現状をできるだけ正確に把握する必要がある。）

(9) 教育が鍵

○　学力重視の教育ばかり頑張ると、島の人口を減らすことになる。大学に行かずに高校を出て地元で仕事をしていく人を育てる道筋も大切。(洲本市)

○　2015 年度の学区再編が決定的。これで学生の動きが変わった。洲本向きの子が神戸向きになり、高校段階で島外に出る子が増えた。(淡路市)

【検討課題】

子どもの教育（特に学校教育）は、人口の移動や将来の地域力に大きな影響を与える。未来の鍵となる教育の将来ビジョンとして、どのような方向性が考えられるか。

＜神戸市＞

（人口の動き）

・総合計画とは別に、神戸創生戦略を 5 年前に慌てて作った。目標の年間 1.2 万人の出生数維持と東京圏への転出超過年間 2,500 人の解消は、いずれも達成できていない。
・人口は 2012 年以降 8 年連続で減少。特に自然減が拡大しており、2018 年は約 5 千人の自然減。出生数が全区で減少しており、北区、西区、垂水区等は 10%以上減少。
・昨年、東灘区が震災以降、初めて自然減になった。西宮などに人が流れている。
・長田区、兵庫区は震災前からマイナスが続いている。須磨区は 15 年、垂水区は 12 年、北区は 11 年連続で減少。西区のニュータウンも 5 年連続マイナスで厳しい状況にある。
・合計特殊出生率は 2005 年以降上昇傾向だが、全国、兵庫県よりも低い水準である。
・生涯未婚率が上昇傾向。男性は全国平均より低いが、女性は全国平均より高い。
・社会増減は減少傾向にあり、2018 年は 22 人とかろうじてプラスの状況。
・外国人の増加が社会増に寄与している。ベトナム人がずば抜けて増えており、兵庫区、長田区で急増。今後、人口ビジョンで外国人をどう見込んでいくか悩ましい。
・転入超過は中央区の 1,740 人が最多で、20 年連続で増加。兵庫区、長田区も外国人の流入で 3 年連続、東灘区は 20 年連続で増加しているが、増加幅は減少傾向にある。
・灘区は 1997 年以降転入超過だったが、2018 年は転出超過だった。西区、須磨区、北区、垂水区は 3 年連続マイナス。中央区、兵庫区、長田区以外は苦戦している。
・15～19 歳で大きく転入超過、25～34 歳で大きく転出超過となっており、大学入学で学生が転入し、その後就職で転出している状況。東京、大阪に人が流れている。
・男女とも似たような傾向だが、女性の 20～24 歳は転入超過が多い。子育ての関係で親元に近いところを選択しているのだろうか。
・対東京圏では 2,500 人程度の転出超過で推移してきて、創生戦略ではその解消を目指したが、2017 年、2018 年と転出超過が拡大し、状況は悪化している。
・2008 年時点では東京圏以外は転入超過だったが、2018 年では東京圏以外に大阪市、阪神間 6 市、明石市が転出超過となっている。

（総合計画・創生戦略について）

・神戸 2020 ビジョン（総合計画）と神戸創生戦略は 1 年ずれている。創生戦略を 1 年後ろに引っ張って 2020 ビジョンと年度を合わせて、2020 ビジョンの改訂版の中に創生戦略を取り込んで 1 本化する形で検討を進めている。現在、将来人口推計の作業中。
・国の次期戦略の内容が見えておらず、国の方向性を取り込むことも考えると、1 年ずらして作る方がよい。次の計画で何に取り組むかは国の動きも踏まえていきたい。

（今後の方向性）

・漠然とだが、今までの“人口規模を維持する・増やす”や“山から海へ”といった話ではなく、一人ひとりの市民の生活の質を高めて「深みのある上質な街」を打ち出す方向になっていくのではないか。
・ただ、これを KPI でどう表すかは難しい。人口は 1 つのバロメーターとして必要だが、神戸に住んでいる市民の満足度や神戸の魅力が上がることが大切。三宮の魅力が上がれ

ば企業も立地するし、結果として、都市としての規模の維持にもつながる。

・「リノベーション神戸」も打ち出していく。川崎市に人口で逆転され、人口減少率が政令市でワーストワンといった背景から、年度途中から新たな人口減少対策を進めている。年度内に第2弾、第3弾の打ち出しをしていきたい。

・総合計画も、もっと短期で考えるべきではないか。変化が激しい中で何十年先の構想が必要なのか。年度単位の予算に近いイメージで作った方が良いという感覚だ。地方自治法が改正され、基本構想、基本計画の作成義務が外れたこともあり、総合計画は内容をできるだけ簡素化し、短いタームで作る方向になっていくと思う。

・兵庫区と長田区で急増している外国人の大半は、臨海部の大企業の工場労働者だろう。勤務地の近くに住んでいて、夜間に働く人が夕方、兵庫駅に迎えに来るバスに乗り込んで出勤しているようだ。

・人口移動はマンションの建ち方によって変わる。中央区の人口増はマンション販売によるもの。交通の便が良い駅近に、高齢者も含めて人が集まってきている。ドーナツ化現象の逆の動きが起きており、それに対して市として現在、マンション規制の動きを取りつつある。

・東京への転出超過の最大の要因は、学生が神戸の企業に就職しないこと。働く場所がないわけではなく、企業情報の提供もやっているつもりだが、東京の方の賃金が高いということもあって人が流れている。「若者に選ばれるまち」をテーマに掲げ、プロモーションを展開していて、部分的には成果が出ているが、全体の動きに引っ張られて、思うような結果が出ていない。

・起業支援にも力を入れている。人目を引く取組であり、話題にはなるが、転出超過を止めるという意味では、限界がある。

・出生対策で経済的な措置をやっても、なかなか出生増に結び付かない。毎年強く打ち出しているが、近隣市に人が流れている状況。

・北区、西区の農村部の振興も重要なテーマだが、今は出生増、社会増の2つの目標の達成に注力しており、施策が追いついていない。

・オールドニュータウン問題もある。名谷などのリニューアルを進めないといけない。市内で人口がうまく流動するように持っていきたいが、現状では、明石や西宮などに出て行ってしまっている。神戸市内で魅力的な住宅が提供できていないということもあるが、やはり駅前再開発に人が引き付けられる流れが強い。

・交通関係では、北神急行を市営化するが、それ以外の構想は今のところない。阪急と地下鉄の直通化の検討が進んでいるが、三宮が通過点になり、賑わいがなくなるという指摘もあってなかなか難しい。

＜西脇市＞

（人口の動き）

・進学率の向上に伴い、1980 年代から毎年 200 人前後の転出超過。産業振興、子育て環境の整備などに取り組んでいるが、社会の趨勢には適わない。
・近年、若い女性の転出が拡大している。転出先は大阪が増え、神戸より多い。大阪の方が魅力的な職場があるということだろう。市内で女性が働く場所が少ない。介護・医療が中心だったが、女性も学歴が上がれば都会へ出て行く。
・U ターンをしたくても受け皿（魅力的な働き口）がない。地元の金融機関も人の確保には苦労している。市内企業は即戦力をほしがるが、それに見合う給料を払えない。
・転出者の絶対数は男性の方が多い。男性の働く場所は市内にもあるが、京阪神の工場がより高い収入を提示して彼らを迎え入れるので、京阪神へ勤めに出てしまう。
・市内の事業所の人手不足が深刻。東播磨より北播磨の方がずっと有効求人倍率が高い。ミスマッチが生じている。介護などは求人しても人が寄りつかない。
・西脇工業高校が象徴的だ。昔のように地元の播州織関係の企業ではなく、京阪神の企業へ行ってしまう。駅伝で全国に名を知られるようになったこともあって生徒のレベルが上がり、優秀な生徒から京阪神の企業へ取られてしまう。大学進学率も上がっている。
・加東市に人を取られている。多可町や丹波市から西脇へという動きもあるが、最近多可町からは直接加東市へ行く人が増えている。総じて北から南へと流れている。
・神戸と大阪の時間距離が変わらない。大阪まで高速バスで一本なので、正直大阪の方が行きやすい。大阪までバス一本か、三田まで出て福知山線で通勤している人もいる。
・ここ数年、金属産業や縫製業でベトナム人労働者が増えている。外国人住民が 600 人。うちベトナム人が 240 人ほど。ベトナム人の増加で社会減が改善している。
・企業が借り上げた住宅に数十人のベトナム人が住んでいる。雇用主が責任を持って彼らの面倒を見ており、トラブルらしきものはない。若い男性の技能実習生が多いが、詳しい実態がわからない。外国人住民との垣根をどう取り払っていくのかが課題。

（総合計画・創生戦略について）

・地方創生で「ファッション都市構想」を進めている。縁もゆかりもない若者が現在 20 数名、播州織関係で働いている。3 年間人件費を補助し、最終的に起業してもらうのが目標。播州織のブランド力を高めたいが、生産量がピーク時の 10 分の 1。生地産地なのでブランド名もつかない。ここに新しい風を吹き込む必要がある。
・全国からデザイナーの卵を呼び込み、市内の企業に就職するという形につなげたい。播州織で企業の内部ブランドが立ち上がるなど、若い人たちが新しい風を吹き込んでいるが、それが生産量増加に直ちにつながるわけではないところが難しい。
・ファッション業界で働きたい若者は一定数いるのに、服屋の売り子くらいしか仕事がないところに、デザイナーとして食べていく道があると示したところが学生に響いたのだろう。「個人の夢」「雇用」「地元資源」のマッチングを考えることが大事。
・コワーキングスペースは、デザイナー系の人が時間外に活用し、デザイナーの活動を地域に波及させる拠点になっている。まず人の動きを見せていくことが大事。

・いちご農家を育成するスイーツファクトリー支援事業も行っている。ビニールハウスで2年間修行し、農家として独立する。

（今後の方向性）

・西脇は平野部が少なく、大きな工場などを引っ張ってくるのは困難。もともと地元にある産業に活路を見いだすのが市のスタンスで、いろいろと政策も行っているが、大きな社会の流れには抗えず、社会減をなくすのは困難というのが現状。
・中心市街地に再び注目したい。古い街中に新築ができて、若い人が住み始めている。大きな流れとまではなっていないが、新陳代謝が出てきたのではないか。
・釣り針も地場産業だが、メーカーは世界を相手にしており、地元での活動は限られている。中国との競争が激しく、世界で勝負していくためとして、西脇から大阪へ本社を移していく流れだ。その方が人が集まる。
・農業では山田錦と黒田庄和牛。酒蔵の誘致ができたので、東京農大と連携して学生を引っ張ってきて、ファッション都市構想の農業版をやりたいと思っている。
・マイクロンジャパンの撤退で1,000人以上の雇用が急に消えた。基幹産業は播州織、次に金属産業、サービス産業。介護福祉もいつのまにか基幹産業になっている。
・観光産業は弱い。元々観光よりも産業で食べてきた町だ。播州織の博覧会やマルシェを開催して人が集まってくるようにはなっている。産業遺産の活用も考えたい。
・市役所が中心市街地の一番東に移転する。土地の動きに効果があったようで、最近、空き家を壊して更地にして、新しい家が建つようになってきた。国道427号の整備も進んでいて、そういったものが住民の目に映っているのかなと思う。
・自治会活動の担い手の高齢化に対応し、自治協議会の立ち上げを進めている。以前は世帯主がムラの役員会に出ていたが、自治協議会では個人会員方式を進めている。旧村のまとまりである全8地区のうち3地区で導入済み。田舎の方を中心に動いており、地域の危機意識と比例している。黒田庄では比較的若い人も入ってくれているが、「若い者が生意気を」という人もいて、なかなか難しいところもある。
・自治協議会ができても自治会はしばらく存在する。自治会は日役の割り振りなどを担当し、自治協議会では移動販売車の事業をするなど、役割分担をしている。
・県の区分では「多自然地域」となるが、市民は「西脇は都市だ」という思いが強く、都市機能の充実を求める声が大きい。しかし、2050年には街全体がやせ細っているだろう。
・郷土教育もやりたいが県立高校は忙しい。住民ニーズは「いい大学に進学させてくれ」というもの。市から郷土教育を押しつけても現場の先生方がしんどいだけ。ニーズを間違えると行政の都合だけになってしまい失敗する。
・若い女性が帰ってくる上での課題は旧態依然としたルール。そもそも女性の賃金を上げないといけない。田舎ではまだまだ認識が低い。女性が生き生きと働ける環境が必要。地域の因習が阻害している。働きたい職種がないのも大きい。
・子育て支援の地域間競争では小野市が先行している。経済的な支援があって子育てが便利なら皆そっちにいくが、全国的に横並びになってきているので、しんどい状況。

＜加西市＞

（人口の動き）

・長らく年 200 人以上の社会減が続いてきたが、それが 2016 年頃から鈍化し、2018 年には社会増に転じた。これは外国人の流入によるもの。ベトナム人の流入が増えている。
・外国人を除くと相変わらず転出超過の状態で、転出先は加古川、姫路など播磨臨海部と神戸が多い。JR 沿線で働ける場所へ行く。加西市は製造業の町なので、女性の仕事が少ない。小野市に住んで加西で働く人は多い。加東市、福崎町には大学もある。
・20 代、30 代の女性が減少。小野市、加東市への転出が多い。結婚を機に出ていく人が多い。子どもを産み育てやすい環境を作って出生率を上げようとしているが、子どもを生む人が出て行って、結婚しない人が残っている状況なので、出生率は上がらない。
・加西は昼間人口が多い。昼夜間比率が今も上昇しているはず。市外に暮らし市内で働く人が多く、朝はよく渋滞する。外国人の増加もあるが、雇用者数が減っていない。
・ベトナム人が 1,000 人を超えた。北播磨全体に一定規模以上の事業所にはたいてい外国人が入っている。技術を学ぶと国へ帰る人たちで、住まいなどは企業が面倒を見ている。マンションの 1 室や空き家を何人かでシェアして生活する形が多い。
・ゴミ出しのルールがわかっていないといったことはあるが、目立ったトラブルはない。市民アンケートでも特に問題はなさそう。コンビニに行ったら、店員も客もベトナム人ということもあるが。
・家の近くにベトナム人が住み始めて、周辺の住民は気になっているが、彼らを雇用する派遣会社から、自治会には入れてくれるなという要望があり、ここ 5 年ぐらい自治会に入っていない状態。
・出生率が近隣市町より低い。出て行った女性が戻ってこない。未婚率も高い。35 歳までで男性 50%、女性 33%で県下ワーストクラス。近隣市町より段違いに高い。理由はよくわからないが、実家が居心地よく、結婚するインセンティブが働かないのではないか。独身で自由な暮らしを謳歌している人が多い印象はある。出生率が下がるのは豊かな証拠でもある。しかし、将来の 8050 問題が心配だ。

（総合計画・創生戦略について）

・どこも同じだが、中心部に人が集まり、周辺の高齢化率が高く、空き家が増えている。
・産業振興計画を作って、産業団地の整備を進めている。進出予定企業の話では、それなりの雇用を予定していると聞くが、女性の雇用は難しそうだ。
・ものづくりに若い女性が関心を持つようにしないといけない。女性にとって魅力的な職場を作る必要があり、魅力的な職場であるよう見せる方法も考えないといけない。
・市内の中堅企業の人材がほしいが、法学部を出たような学生は就職してくれない。加西より東の大学卒だと、加西には戻らない。皆、東の方に目が向いている。
・I ターンは少ない。新規就農には力を入れているが、入ってくる人の数は多くない。
・農業の大規模施設園芸のモデル団地があるが、雇用者数は 80 人くらい。あの場所はそれが精一杯だが、ハウス栽培をやりたい人が集まる地域にしていきたい。
・三洋電機の創業の地で、ものづくり精神が未だに根強い。そういう土台の上に、AI・IoT

や農業をどう組み合わせるか。今までの単なる延長線ではいけない。
・三洋電機に鍛えられた企業が多く、三洋から自立して自社ブランドを磨いた企業が市内に残っている。今大きな存在になっている伊東電機もその一つ。

（今後の方向性）
・市の中心部にある旧北条町役場の庁舎跡に、多文化共生拠点となるセンターと日本語学校を整備できないかと考えている。ベンチャーのスタートアップ支援施設を作るというアイデアもある。その通りにはホテルができて、周囲には空き家がたくさんある。アクセスもよいので、市の中心部として機能するエリアにしていきたい。
・加西のように都市でも田舎でもない地域を、県のビジョンでどう位置づけていくのか。やはり多自然地域の区分で、ゆったり暮らせる地域といった方向性になるのか。ヨーロッパなどでは、田舎でも豊かな暮らしが営まれていると思うが、そういう暮らしができるようにするために何をしていったらよいのだろうか。
・市単独での取組には限界があるが、今進めている定住自立圏や連携中枢都市の枠組みでは効果的な取組がしづらい。更なる合併をして大きな枠組みを作るしかないのだろうか。しかしそれでは、周辺が更に寂れるだけだろう。
・定住自立圏は細かい変更でも議決が必要。実務レベルの裁量の範囲が狭い。取り組むことを絞り込んで、一つひとつ実を上げていくべきだが、税務事務の共同化やゴミ処理一つとっても、それぞれの市町の考え方があって、なかなかまとまらない。

＜加東市＞

（外国人の状況）

・日本人は自然減・社会減だが、外国人が増えて人口が維持できている。外国人は昨年比300 人増の 1,650 人。外国人増加率全国トップクラスと聞いている。うち 1,149 人がベトナム人。ベトナム人は真面目で器用。地域の評判もよい。ちゃんと挨拶をする。ゴミ出しなどの地域のルールを知らない時はある。

・工業団地で多く働いており、数は一つの会社が突出しているが、会社がきちんと指導している。場所によって違うゴミ出しの曜日など、会社では面倒を見切れない部分もあるので、その部分は市でも工夫をしていかないといけない。

・市役所に翻訳機を入れた。これで円滑にコミュニケーションできるようになった。ベトナム人は数人のグループで来庁して、うち１人ぐらいはカタコトで日本語をしゃべる。

・ベトナム人からしたら定住ではない。どれだけその会社に在籍できるかが勝負。1 年から 3 年経てば帰国し、入れ替わっていく。一時的であっても市民に変わりはないので、気持ちよく帰ってもらえるようにしないといけない。企業によっては居続けてほしいということで日本語教育をきちんとしているところもある。

・広報紙等の必要な情報を翻訳して提供しているが、翻訳できる人がなかなかいないし、費用がかかる。やしろ国際学習塾で日本語学校をしているが、教え手の確保が困難。ベトナム人と日本人がそれぞれカタコトの日本語とベトナム語と身振り手振りでやっている。県の国際交流課に在日コミュニティとのつなぎなど支援をお願いしている。

・彼らは車を持っておらず、歩いて生活できる環境でもないので、自転車を使っている。警察と一緒に交通安全大会をして、自転車講習をしている。

・住むところはたくさんある。滝野社を中心に新しいアパートがどんどん建っている。都市計画の中で広めに市街化区域を設定したところに戸建て・アパートが建つのがここ 20 年の動きだが、周辺市町の人口減少が進む中で、今後は流れが変わるだろう。人口を維持するためには、加東市を面白い街にしていかないといけない。

・「どこにあるのか分からない」と言われるが、京阪神から車で 1 時間のアクセスである。遊びに来る人も住んでいる人も楽しい地域にするため、県のスポーツサイクルの事業や市でもフットパス自転車版を考えたい。

（人口の動き）

・滝野 1 万 2 千人、東条 8 千人、社 2 万人。中心的な市街地のない滝野の人口が一時期減ったが、住宅需要により今は回復。

・東条が少しずつ減っていて歯止めがきかない。東条は山田錦の生産地区だが、生産者の大半が 60 歳以上。山田錦を守るためにも東条の人口を減らしてはいけないが、農業では採算が合わない。そこで、新しい雇用の場として工業団地を整備したい。農業と兼業できるような雇用が生まれたら山田錦も守れるはずだ。

・各家の跡継ぎがいない。空き家ばかりだ。商店も次々となくなっている。30 年先のビジョンなら、その辺りをどうするかを考えないといけない。コンパクトシティとして住民を集めていくのか、自然体に任せるのか。

（今後の方向性）

・教育に力を入れる。子育て世帯を集めるなら教育だ。学力は全国平均並みと聞いているが、小中一貫校化して教育の魅力を高める。小中一貫校の成功事例を作り出したい。

※加東市の小中一貫校は、社中学校と同地域の５小学校で構成され、児童・生徒数は約1,200人。現在の同中学校周辺での建設を計画している。2024年春の開校を目指す。

・社高校と小野高校のどちらを選ぶかという話もある。市としては、加東市で育った子は社高校に行ってほしい。ともかく教育が地方創生の一丁目一番地。力を入れている。

・健康政策にも力を入れている。農家の収入を増やすという狙いもあり、もち麦（大麦の一種）を食べて健康になろうという運動を行っている。社高校生活科学科の生徒たちがマルヤナギと一緒にもち麦の商品開発に取り組み、注目されている。県の加東農林振興事務所も力を入れており、大麦の生産を増やしていきたい。

・製造品出荷額が北播磨でトップだが、加西や小野とつながっているから、雇用の場は必ずしも市内でなくてもいい。将来的には工業団地の整備を考えていきたいが。

・ホテルを誘致したい。ホテルがないので、お客さんが来ても姫路のホテルまで迎えにいかないといけない。加古川線を使ってくれとはとても言えない。

・市町ごとに目指す将来像が違うので、どうやって整合を取るかが難しい。東播磨と北播磨で一つのビジョンとなると、臨海部とこの辺りは全然違うので、いろんな絵を描かざるをえないだろう。

・ビジョンで何を変えていくかを明確にしてほしい。一つ大事なのは広域公共交通をどう充実させていくか。通勤を便利にしたら、人は残るはず。

・加東市は中心がどこにあるのかはっきりしない。そこで県の社総合庁舎周辺にバスターミナルを整備し、中心にしていきたい。バス乗り場がバラバラなので、それらを一カ所に集めて、市内の東西南北、神戸・大阪・明石へ行ける結節点にしたい。

＜豊岡市＞

（人口の動き）

・有配偶女性の減少により出生数が急減。結婚さえすれば、生む子どもの数は比較的安定しているので、若い女性さえ帰ってくれば子どもの数は下げ止まるのではないか。

・本市独自の指標「若者回復率」（10 代の転出超過数に対する 20 代の転入超過数の割合）が 2010 年男 34.7%、女 33.4%→2015 年男 52.2%、女 26.7%となっており、男性は帰ってきているが、女性が帰ってこない。これは、ジェンダーギャップの影響ではないか、豊岡は女性を大切にしていないのではないか、という分析をしている。

・例えば法事があると男は酒を飲んで騒いでいるが、女は炊事場で料理してお酒を出す。そんな地域に誰が帰りたいと思うだろうか。そういうところを改めて、女性が生き生きと暮らせる地域を作らないと人口減少は止まらないのではないか。

・女性の働く場所も、女は事務的な仕事が合うだろうということで、逆にそういう選択肢しかない状況がある。こうした状況を変えるため、「ジェンダーギャップ解消戦略」を打ち出して、地域、企業一緒になって、若い女性が帰りたくなる、住みたくなる地域を作っていこうとしている。

・人口は、但東の減り幅が大きく、竹野は頑張っている。出石は上がったり下がったり。全体として旧豊岡に人が集まってきている。市としては、旧市町間の較差解消よりも、市全体として若者に帰ってきてもらう取組を進め、その中で、旧市町ごとに、それぞれの特色を出して頑張っていこうという作戦で動いている。

・転出先は京阪神が多く、転入元は 5 割が県内、2 割が但馬 2 市 2 町。新温泉の人が結婚を機に豊岡に住むといったパターンが多い。但馬の市町の人口減少が転入減に直結する構造なので危機感を持っている。

（外国人の状況）

・現在人口の 1%、約 800 人の外国人住民がいて、少しずつ増加している。漁業の実習生、工場が抱えている留学生などいろいろいて、これからも増えていくだろう。多様性を受け入れる共生のまちという視点からの取組が必要になってくると考えている。

・現在、神戸大学と共同で外国人住民の実態調査をしている。外国人住民の増加分の 2～3 割が若い女性で、工業団地内の派遣、インターンが多いところに注目している。

・国籍はベトナム、中国、インドネシアが多い。中国人は言葉も上手な人が多く、見た目にわからない。在留資格も永住、技能実習など様々で、それらの違いがどうなっているのか、その辺りをきちんと調べたい。

・子どもの調査もしていこうという話をしていて、国籍は日本でも、両親のどちらかが外国人の場合に何かハンディはないのか、といった辺りを調べたい。

（総合計画・創生戦略の状況）

・教育者の東井義雄、冒険家の植村直己の精神を継ぐ街として、平成 24 年度に「豊岡市いのちへの共感に満ちたまちづくり条例」を制定し、「小さな世界都市」を目指す基本構想を定めて、今のまま立ち止まっていては沈没するという危機感から取組を進めている。

・そのうち「人口減少」に対抗する取組を特出ししたのが創生戦略であり、その肝は「豊

岡で暮らすことの価値」を知ること、高めること、発信すること。特に子どもが本物に触れることのできる街ということで、世界の一流の芸術文化に触れる機会づくりに力を入れている。「ただでは東京に行かさない」という市長の強い思いがある。

・その関連で特色があるのは、社会増対策でもあるアーティスト・クリエーター移住促進の取組だ。平田オリザ氏の劇団の拠点が東京から日高に来る。演劇の街ということで、女優の河合美智子さんも移り住んだ。こうした動きを広げていきたい。

（今後の方向性）

・現在次期戦略の検討中。「子どもを増やす」という言い方が、ジェンダーギャップ解消の切り口とも合っていないので、まずこうした表現を見直したい。

・ジェンダーギャップの解消が最大の課題。働き場がないわけではない。いったん仕事をやめると賃金が男性の半分になるといった賃金体系をどうするか。仕事をやめずに働き続けられる働き方をどうやって実現するか。その辺りの取組が重要だ。

・専門職大学ができて、学生、教員、外国人と、これまでになかったような形で人が集まるようになる。我々の意識が変わるよりも先に現実が変わっていくだろう。

・市の問題は施設の保有量が多すぎること。例えば小中学校。統合すれば、複式学級が解消され、教育の質も維持しやすい。一方で、通学が一層不便になり、逆に住みづらくなるという話もある。こういうことに一つ一つ取り組んでいかないといけない。

・産業面では、企業誘致などより、働き方を変える取組の方が大切。かばんなどの地場産業、温泉などの観光産業、それと農業。そこで儲けられる人が育つ地域を作りたい。かばんだと革小物、財布などが売れていて市外から職人になることを目指して来る人がいる。こうした部分を伸ばしていきたい。

・専門職大学の卒業生に、いかに地元に止まってもらうか。今のところ温泉、観光業への就職というイメージだけで、演劇が食い扶持になるイメージがまだ描けていないが、「深さをもった演劇の街」として、そこで稼げる仕組みを考えていきたい。

・この前やった演劇祭は、予想以上に盛況で宿泊者も多かった。平田さんが言うように、10 年後には世界的な演劇祭になるように回を重ねるごとに発展させていきたい。

・但馬全体で一緒にやっていくテーマも、専門職大学に絡めて考えていきたい。高校生のふるさと意識を高めることも大事で、それと合わせて次期戦略に盛り込みたい。

・神鍋が外から若い人が入ってきて活性化している。パラグライダー、マウンテンバイクのダウンヒルなど事業者（アップかんなべの運営者である㈱アドバンス）が頑張っている。竹野も地域おこし協力隊を中心にいろいろな動きがあって面白い。

・市として産業全体でこれというものはないが、それぞれの地域の良さを伸ばしていくのが本筋だろう。日高は神鍋がアウトドアで街中は平田オリザさんを中心にした演劇。竹野は海。出石はそばと若い女性たちの活躍。城崎は温泉。但東がこれというものがまだないが、農家民泊で子どもたちを受け入れて、という方向性か。

・豊岡駅前のシャッター街が変わらぬ風景になっている。小さな動きはあるが、大部分が住居で、大きな動きにならない。何かやるにしても、家賃が高い。この街中こそ危機感のなさという意味で、一番課題のある地域かもしれない。専門職大学の 1 年生は寮生活だが、2 年生から周辺の空き家を借りて住むといった展開になれば面白いのだが。

＜養父市＞

（人口の動き）

・人口減少が加速している。昨年は自然減・社会減ともに約 260 人。社会減を 100 名に抑えるのが戦略の目標だが、策定当時の社会減約 180 人から大幅増加。
・出生も減少。その要因は未婚化・晩婚化と出産可能な若い女性の減少。婚活の取組も進めているがあまり効果は出ていない。
・社会減は、進学（18 歳）と就職（22 歳）時点で都市部へという流れと、自宅の購入（30 代）で近隣自治体へという流れ。自宅の購入は、より交通利便性の高い豊岡、和田山などを選ぶ傾向がある。一方、香美町から養父市へといった転入もある。
・転出者からは近隣自治体の方が子育て施策が充実しているという声もある。進学で一度市外に出た後、就職などで戻ってきた人がいても、子育ての段階で近隣自治体に逃げてしまうのが残念。
・若い人が家を購入する際、中心部に集まる傾向があるが、新築用の土地がないために、住宅購入時に市外に人口が流出している。農地を宅地に転用するのは、手間も時間も費用もかかる。そこで、市有地を民間に払い下げて宅地分譲を進める取組を 3 年ほど前に始めたところ、その地区だけは順調に人口が増えている。
・周辺部はなかなか人が入ってこないが、原風景が残っているエリアは空き家バンクを活用して移住者が入ってきており、移住者が地域によい影響を及ぼしている。
・移住者は 1 年に 10 組ほど。設計、デザイン関係など手に職を持った人が多い。また、リタイア後のセカンドライフ的な移住者も多い。
・空き家バンクの利用は市民も多い。市外からの問合せは、東京からは少ないが京阪神地域からは多い。
・外国人に関しては目立った動きはない。100 人ほど外国人住民が住んでいる。企業から労働力としてのニーズはあるが、求人をしてもなかなか集まらない状況。

（総合計画・創生戦略の状況）

・地方創生戦略は第二期を作成中。第一期の結果は芳しくない。これまでは農業をスポットに当て、「やぶぐらし」を PR してきた。
・進学で市外に流出するので、高校生までにふるさとのイメージを伝え、育成しておくことが大事。人口構造の若返りをしないといけない。
・市民にそれほど危機感がないように感じる。人口が減っても仕方ないかという感じ。危機感を持っているのは行政の方。区長のなり手がいない、祭りができない、農業の担い手がいない、地域の仕事が回らないなど、問題は多々ある。当事者意識を持ってもらえるように市民に働きかけていくことが大切。
・国の Society5.0 の動画のように、30 年後の養父をこんな風にしたい、そのためにこうする必要があります、といった啓発が必要と感じる。
・外から人が入ってこないと地域が持たない。観光であれ何であれ、市外から来る人と養父市が一緒になってやっていかないといけない。例えばドローンを飛ばしていろんなことができる地域になるような取組を進めているが、それが普及する未来は実現可能なの

か。どういった分野を広げるのか、また絞るのか、考えないと行けない。

・人がいなくなった集落がある。無人化して、そのままの状態になっている。人がいなくなった土地は原野に戻るだけかもしれないが、空間の管理という面から考えると、中心部に人を集めるまちづくりは良くない。集約した方が行政コストの削減にはなるが、まばらでも人がいる方が地域の保全につながる。

・集落単位の活動が難しくなってきているので、旧小学校区単位に地域自治協議会を立ち上げて、支援策として包括交付金を1億円ずつ出している。

・国家戦略特区では、現在12社が農業に参入し、46 haを耕している。不耕作農地が活用され、雇用創出の効果もある。ただ、市民生活レベルで効果は実感されていない。制度が全国展開されるようになり、もはや養父市だけが先進的なわけではない。

・特区では、テレビ電話による遠隔服薬指導も行っている。テレビ電話のメリットは患者の家の中の様子まで分かること。医師の働き方改革にもつながっている。

・特区事業で始めた自家用有償運送は区間が限定されているが、徐々に利用者が増えている。今年は半年で180件ほどの利用。初年度だった昨年は1年間で160件だった。公共交通を支える仕組みはこれからますます必要になる。

（今後の方向性）

・養父市は何で食べていくか。農業がメインだが、農業だけでは食べていけない。ほとんどが兼業農家である。新しい産業が生まれないと持たない。

・Ｉターンで入ってくる人に多いICT関係の仕事は居住地の制約は少ないが、他自治体との取り合いである。また、どこでもできる仕事は、たいてい小規模だ。人口を増やすという意味では、大きな事業所が来ないとダメだが、市単独ではなかなか難しい。

・市役所と病院は雇用に大きく貢献しているし安定している。それくらいの規模の事業所がもう少しあれば。警察署が再編され、養父署が朝来署に統合される影響は大きい。但馬全体で見ても、警察職員の家族も含めて相当数の人口が減ることになる。そうは言いつつ、市も職員数を減らしているが、これも行革でやむを得ない。県民局も規模を縮小しないでほしい。

・人口流入という意味で専門職大学ができるのは大きい。学生が来て、地域にどんな人材が供給されていくのかを仕組んでいかないといけない。

・勤務地は豊岡市や朝来市でも、住むのは養父市と選んでもらえるように地域の魅力を高めていかないといけない。

＜朝来市＞

（人口の動き）

・市では定住促進課を設置して社会増に注力してきた。自然減は約 250 人だが、社会減は緩和傾向で、過去に約 200 人だった転出超過が昨年は 107 人になっている。移住補助制度を活用して移住してきた人は年間 100 人ほど。

・転入元の割合は都市部と近隣自治体が半々。豊岡、養父辺りから一定の転入がある。市内に住んで、市外に通勤という人が増えている。高速道路が整備され、姫路、福知山、豊岡が通勤圏になっている。昔は通勤補助を行っていたが今はしていない。

・社会減が 200 人から 100 人ほどになった要因は、住みたい田舎ランキング 1 位（2018 年近畿版ランキング）になったこと。移住相談の電話がひっきりなしにかかってきた。やはりメディアの威力はすごい。養父市も 2019 年に 1 位を取っている。

・周辺部から市内に行く流れは顕著ではない。子どもが大きくなったので市内のアパートが手狭になり、周辺部の空き家へ移る、というのはある。

・生野は三菱マテリアルの工場閉鎖で一気に人がいなくなった。

・外国人は徐々に増えてきている。今後は外国人にも住みよい街にすることが大切。

・2007 年度に小学校区単位の地域自治協議会の立ち上げを始めて 10 年以上経った。和田山中心部などまだそれほど危機感のないところもあるが、イベント中心から地域で儲ける仕組みづくりに移行している地域が出てきている。

（総合計画・創生戦略の状況）

・新規就農者に対する支援を行っている。耕作放棄地が増えており担い手がいない。農業の親方に付いて学び、自立して農業が始められるような取組を進めている。

・空き家、空き店舗の活用が重要。和田山駅前が空き店舗だらけになっているので、ここに特化した空き店舗活用の取組をしている。朝来に移住を考える人の多くは、駐車場があって、家庭菜園ができて、というイメージを持って来るので、そういう場所を確保できない駅前にはなかなか住んでくれない。そこを何とかしないといけない。

・市内にもたくさん企業があるが、人出不足という声をよく聞く。企業を誘致しようとしても働き手がいるのかと、企業が不安がって来てくれない。

・地元によい企業は多いが、高校生が知らない。ここ 3 年ほど、生野高校、和田山高校の総合学習の一環でキャリアトークカフェとして市内企業との懇談の場を設けている。

・高校卒業で半分が市外に出てしまう。大学卒業後に戻ってくるが、割合としては 1 割か 2 割。都会に出ても帰ってもらえるようにすることが大事。そのためにも高校生の時点で朝来市に魅力を感じてもらわないといけない。

・生野高校に観光グローバルコースがあり、姫路市や播磨町から生徒が来ており、寮も整備している。ただ、去年の入学者はゼロで、なかなか厳しい。

（今後の方向性）

・京阪神から 1 時間、海にも 1 時間という地の利を生かして移住者の受け入れを増やしていきたい。移住者は、農業を志向する人以外に、起業を目指す人もいる。朝来市ではそういった人を「ASAGOiNG（アサゴーイング）な人」と呼んで支援している。

・竹田駅近くの保育所跡をインキュベーション施設にした。そこで始めた事業が軌道に乗ってきた人には市内に店舗を構えてもらう。最初は細々とした商売だが、インターネット販売やイベントへの出店で販路を広げて頑張っている。こうした人をもっと増やしていきたい。
・空き家バンクも充実させていきたい。空き家への移住者は年間 10 件ほど。空き家は多いが、中に家財道具があったりして、利用可能なものは少ない。地域の決まり事を理解してもらうことが大切で、日役などの説明をしている。
・小規模集落の見通しは厳しい。問題は足の確保。朝来市は谷が多く、公共交通を走らせるといくらお金があっても足りない。乗らないと交通サービスはなくなっていくが、住民は乗らない。皆自家用車を使う。今後は有償運送対応も考えないと行けない。
・1970 年代後半に開発された住宅団地で、国土交通省のグリーンスローモビリティの実験を行った。高齢化が進んでいるが、バス停から家までが遠いのが問題で、路線バスと接続してバス停から家までのルートをつないだ。いずれは自動運転で代替できるようになると思うので、検証を続けたい。
・高速道路が整備されるに連れて、和田山が通過点となっていく可能性はある。竹田城の入込数も一時期は年間 60 万人だったが、今は落ち着いて 20 万人ほどになっている。
・近年多いのは中国、台湾からの外国人観光客。観光地としては竹田城、生野銀山、神子畑選鉱場跡。神子畑は年 1,000 人程度の入り込みだったのが、今は 1 万人ぐらいにまで増えている。建屋が残っていたらよかったのだが。明延まで一円電車が復活したら面白いとも思うが、民間の持ち物なので難しい。
・豊岡にできる専門職大学は、豊岡の施設ではなく、但馬全体の施設だと思っている。学生に朝来に住んでもらえるような環境整備もしていきたい。

＜香美町＞

（人口の動き）

・2016 年度から本格的に移住定住施策に取り組んでいるが、なかなか成果は出ていない。年間に生まれる子どもは 100 人を下回っている。人口ピラミッドは、若い世代が先細りしていて、非常にいびつな構造になっている。

・阪神間に加えて、近隣市町への転出が多い。香住から豊岡、村岡・小代から養父・朝来への転出が多い。結婚して新温泉町、岩美町へ転出する若者も多い。鳥取側の人と結婚すると、中間の岩美や新温泉に住む人が多い。岩美は、鳥取市街より家賃が安い割に、物件の選択肢も多く、よく選ばれているようだ。

・一番多いのは豊岡への移動だが、豊岡からは朝来へと移動している。但馬全体では、朝来が利便性の高さから選ばれる街になっている。

・町内の移動はデータがないが、多くはないと思う。若い世帯が結婚して、勤め先との関係で、その近くに移るという流れは一定あると思うが。

・結婚、就職のタイミングで豊岡に移動する人が多いのは、若者向けのマンションが豊岡には多くあるから。村岡・小代には町営住宅はあるが、それ以外の賃貸の選択肢がほとんどない。香住には多少の選択肢はあるが、家賃が豊岡とあまり変わらないので、より選択肢の多い豊岡が選ばれる。

・外国人は、漁業、水産加工で一定の就労者がいる。住民数としては 130 人ぐらいだ。この 10 年で少しずつ増えている。漁業ではインドネシアの技能実習生が多い。水産加工では中国人が多いが、中国人がベトナム人に置き換わっているのが近年の特徴。

・また、漁師の奥さんでフィリピンの方が多い。10 年ぐらい前にどっと増えた感じで、日本人と外国人の混合世帯が 40 世帯弱という状況。ただ、その後増えているわけではなく、総数としては、それほど多くない。

・I ターンはぽつぽつある。地域おこし協力隊を含めて年 10 世帯程度。U ターンも一定あると思うが、そちらは町の制度を利用されないので、数としては把握していない。

・I ターンは阪神間の人が多い。多くが空き家バンクの利用者。若い人とシニアに二極化しており、子育て世帯は少ない。住居だけでなく仕事も必要だが、漁協や森林組合に勤めたりするほかは、起業する人が多い。県の ICT 起業の制度を活用している人もいる。

・120 集落中 50 集落が小規模集落である。一番小さいのは香住の本見塚の 1 世帯 1 人。次は小代の熱田が 3 世帯 5 人。熱田は集落移転事業を使って麓に下りた集落だが、一応熱田としての行政区を持って生活している。

・小学校区単位の地域自治組織の立ち上げを本町でも進めることになった。本年度から順次立ち上げていく。将来的には 11 の小学校区すべてに立ち上げたい。

（総合計画・創生戦略の状況）

・子どもがいないと次の世代が続かないので、持続可能な地域をつくるという意味で、「子ども」に焦点を当てて、子育て支援、若者定住などに力を入れている。

・戦略の KPI は半分程度達成したが、人口対策が進んだとか、定住が進んだということにはなっていない。KPI の見直しが必要だ。

・人口減は一律ではない。もっと条件の悪い山間部や離島の町で人口減が止まったり、増えたりしているところもある。やっぱりやりようではないかという思いがある。
・隣町同士で合併して1万数千人の町にはなったが、中途半端な規模だし、旧町ごとにカラーが違うので、逆に思い切ったことがやりにくくなった。旧3町を切り分けて個々に対策を打ち出す方が、面白いことができるように思う。
・豊岡も養父も朝来もそれぞれ個性を出して頑張っているので、うちも負けないようにしないといけない。近く同士で連携ということではなく、他もやっているというプレッシャーの中で競争を強いられている感じになっている。
・今、鳥取市の連携中枢都市圏にしきりに誘われている。新温泉町はもう入っている。鳥取は、鳥取市が20万人で周りが小さい町ばかりなので、鳥取市が中核市として世話役になって引っ張る広域連携をうまく進めている。但馬は、そういう形になっていない。
・香美町自身が売れていない。香住はカニで、美方・村岡はスキーだが、やはり香美町は海のイメージが強いので、その方向で勝負していかないといけないのだろう。観光協会もまだ一本化できていない。3年後を目処に統合という話までようやく来た段階。
・神戸営業所はテレビに出たり、新聞に特集記事が出たりで、「香美町」の知名度を上げるのに効果があった。ただ、香住ガニのPRが効きすぎて、逆に値段が上がりすぎた。

（今後の方向性）
・香美町の主産業は、第一次産業。カニと但馬牛。この2つのA級グルメを生かして2次、3次と展開していく。但馬牛は若い後継者が増えて、大規模化が進み、頭数が増えている。これをもっと伸ばしていく。
・カニは、但馬漁協が資源保護の取組を進めている中で、あまり工夫ができない。周りの鳥取や、京都、石川はそれほど資源保護を言っていないので、その中でどうしていくのか、漁協もいろいろ考えているだろう。
・観光業も育てていきたいが、うちの観光業はほぼカニで成り立っている。カニが取れなくなると、一次産業はダメになり、観光業もダメになるというセットもの。
・かつての香住漁港は日本海側有数の漁港だったのに、近代化に乗り遅れてしまった。柴山、香住の両方の港を再整備して近代化し、遊休施設も活用していく。
・カニが核とはいえ、漁獲量を制限されているので、水産業全体で底上げを図っていくことが大事。その意味で後継者の確保をどうしていくかも大きな問題。
・条件不利のこの地域で阪神間と同じことはできない。低密度地域ならではの産業や、それを支える価値観を育てていかないといけない。インバウンドに足を伸ばしてもらうために何が必要か。漁村の風景を見たいという人や、日本的な良さを生かした、ゆったりした暮らしを体験したい人はいるはず。まず、地元の人がそういう暮らしを謳歌して、それが地域のブランドになって、海外に打って出るといった形になるとよいのだが。
・田舎の波長があう若者が一定数いることは確かなので、そういう若者に選ばれる地域になりたい。今年来た地域おこし協力隊の若者は、大阪の大手プラントメーカーをやめて、木工をするために来てくれた。自分でものを作ったという実感を求めているのだろう。そういう価値観に応えられる地域をつくっていきたい。

＜新温泉町＞

（人口の動き）

・人口減少は、社人研推計通りの傾向を辿っている。転出が圧倒的に多い状況は変わっていない。転出先は隣接する鳥取市が最も多く、次が豊岡、神戸、大阪といった順。広域的には鳥取圏域が一番で京阪神が二番。この傾向も何年も前から変わっていない。
・外国人が増加傾向にあるが、全体で約 140 名と、まだそれほど多くはない。以前は縫製業に中国人が入っている程度だったが、今は様々な業種に広がって、特に浜坂では漁業に入ってきている。旅館業界も外国人の取込みに力を入れようとしている。
・漁業ではインドネシア人が増えている。縫製業では中国人が多かったが、ベトナム人が増えている。水産加工業では中国人が多い。
・農業は外国人を入れるどころか、壊滅のおそれがある。外から担い手を呼んでこようという気力もなかなか起こらない状況だ。
・社会移動の大きな傾向は変わっていないが、ここ 1～2 年の動きとして、子育て世代の転出が減少している。高規格道路が鳥取方面に延びていき、これまで通勤の関係で鳥取に転出していた部分が、新温泉町に止まっているのではないか。
・今は役場周辺から鳥取中心部まで 30 分程度だが、6 年後に高速が全線開通すれば、さらに短縮される。感覚的には、鳥取は町内と同じ感じになるだろう。
・Ｉターンはまだ数える程度。湯村や浜坂は、しがらみが少ないが、集落になると、都会の感覚とはかなり違っていて、なかなか生活するに至らないことが多い。
・空き家バンクに取り組んでいるが、役場としては「挨拶もしないヤツが来た」と言われるのがつらくて、「集落の人とまず話をしてみて下さい」というところから入る。そうすると、そこで話が終わってしまうことが多い。

（総合計画・創生戦略の状況）

・主要産業である観光振興を通じて人口減少を抑制するのが目標。温泉で特色を出していきたいが、宿泊者は 10 年前から微増、近年横ばいで、うまくいっているとは言えない。
・もう一つの柱の農業では、水産、畜産の単価アップが全体の農業収入を押し上げており全体としては悪くない。ただし、カニ、但馬牛と特定のものが牽引している状況なので他産品も伸ばしていかないといけない。
・狭義の農業は、担い手不足と米の単価下落で厳しい状況。産業としての規模は小さくても、山間部の集落を中心に関わっている人口が多いので、影響が大きい。
・今は集落ごとに区長が中心となって活動しているが、いよいよ区長が立てられない地域が出てきている。集落支援員制度を活用してそうした地域を支援していく。
・2050 年の推計人口 6,000 人は、出生率 2.81 の「奇跡の町」として有名な岡山県奈義町と同規模。人口何人であろうと頑張っているところはあって、要はやり方だと思う。
・小規模集落が点在する状況は 30 年後も変わらないだろう。数軒になり、やがて人がいなくなるという流れが進んでいくが、かといって、一つの拠点に無理に移転させるようなことは現実的に難しい。富山市のコンパクトシティが有名だが、そういう施策が合う地域と合わない地域がある。新温泉町が真似してもうまくいかないだろう。

・今無人化しているのは、街から離れた集落で、水道もその集落で完結する簡易水道だから、それを閉鎖するだけの話。町道の管理は、人がいなくなれば疎になるし、通常の除雪もしなくなるだろう。
・かなり以前に国の補助事業を活用して集団移転した後、通い農で維持されている集落があるが、今では通う人も1軒だけになり、いよいよその人がいなくなると、その地域は荒れ放題になるだろう。
・先祖からの土地を守らなければと思って住んでいるのは我々の世代までだろう。次の世代は、わざわざ不便な所に住む必要性を感じなくなって、生活するのであれば、それこそ鳥取でも良いということになるかもしれない。それがいつか、崩れるように一気に始まるのではないかと懸念している。
・大方圃場整備が終わっていてそれなりの農地がある集落でも、農地の維持ができないところまで来ている。

（今後の方向性）
・湯村、浜坂が観光で伸びれば、集落から出たいという山間部のニーズと合って、町が自動的にコンパクトに集約されていくのではないか。
・漁業は、カニの底引き網が牽引しているが、単価が伸びているだけで、漁獲量は減っている。また、伸びているのは一部の大型底引きだけで、一人でやっているような小規模の底引きは伸びておらず、後継者もいない。本当はその辺りを伸ばしたい。
・漁獲量の減少の理由は、資源の枯渇であろう。カニも漁獲量を制限しているし、イカなどはもう獲れない。漁に出ても燃料だけ焚いている状態。北の海では、北朝鮮から漁業権を買った大型の中国船が根こそぎイカを獲っているとも聞いている。
・山陰海岸ジオパークも上山高原エコミュージアムも専門的なことをいくら言っても、一般の集客にはつながらない。もっと一般向けのPRに力を入れないといけない。
・ワーケーションをしたい人は、賑やかな雰囲気よりも、ジオパークのような落ち着いた環境を好むと聞いている。そうした新たな切り口で取り組みたい。
・それぞれの地域の基幹産業を支えるのに最低限必要な人口があるはず。人口減少はそこで一旦ブレーキがかかるのでないか。その下限の人口は、地域によって違うだろう。
・近くにどんな都市があるかも人口移動の大きな要素。新温泉町にとっては鳥取が大きな存在。山陰近畿自動車道が全線開通する頃には、北近畿豊岡自動車道も豊岡までつながり、但馬の交通が大きく変わる。国道9号の交通量が著しく落ち、湯村、八鹿、和田山などが通過点になっていく。豊岡への観光客は増えるが、人の動きは南北よりも東西方向になり、京都縦貫道を通るのが当たり前のルートになる。今はここからだと南に行って中国道に乗るか、篠山から抜けるか、どちらかのルートを使うが、全線開通すると、京丹後を通って京都に向かう流れに変わっていくと思う。
・湯村は浜坂インターから下道で10㎞。いかに浜坂インターで下ろすかが生命線である。浜坂を但馬牛と温泉の力で拠点化していくことが大切ではないか。
・温泉はターゲット別の価格設定をしないといけない。今は良いものを出して、高い単価設定をしているが、例えば夏場はレジャーに来る若者向けのリーズナブルなメニューも考えていかないといけない。

＜丹波篠山市＞

（人口の動き）

・古民家を改修する人など、特化したポリシーを持った人の転入が顕著。空き家の入居も少なくとも 100 件はある。大阪にも比較的近いので、普段は大阪に住んで週末はこちらに来るという週末起業のような人もいる。農家民泊も年 2～3 件開業している。地域おこし協力隊の応募も 7～8 人はある。

・東部から西部に人口が移動している。篠山口駅周辺への一極集中傾向がある。東部の人口減少が著しい。篠山口駅周辺では住宅開発が行われている。

・出生数が伸びない。2～3 年前まで 300 人はあったが、昨年は 250 人。その結果。毎年人口の 1%、400～500 人の減少が進んでいる。

・出生数の減少は、女性の年齢層が上がり、産む世代が減っているからだろう。つまり、すぐに回復するものではない。

・旧篠山産業高校丹南校跡に開校した篠山学園（介護士養成学校）にベトナムを中心に若い女性が 100 人くらい来ている。全寮制で、卒業者は必ずしも地元ではないが国内で就職する。この影響で近年続いていた 100 人ほどの社会減が、昨年は 8 人だった。

・他に目立った外国人の動きはない。人口 4 万人中の 830 人が外国人なので、人口シェア 2%くらい。製造業での就業が多い。

（総合計画・創生戦略の状況）

・市では「住もう帰ろう運動」という定住促進事業と、19 の旧小学校区中心にしたまちづくり協議会の活動支援に力を入れてきた。東部の京都府に近い地域の人口減少が著しく、定住促進の重点地区として住宅補助等を行っている。

・東部の多紀地区には、小学校に隣接して認定こども園を整備し、0～12 歳まで一貫して子育てができるという形で定住対策を進めている。

・地方創生交付金を使った目玉事業が「農村イノベーションラボ」というインキュベーション講座の開設。JR 篠山口駅で神戸大学と一緒に行っている。20 代から 50 代までの人が、起業で成功している人の講義を聞きながら自分の起業プランを考えるという実践的な形式で行っている。現在 5 期目で、卒業生 88 名中 22 名が市内で起業。

・阪神間で昼間仕事をしている人が、電車一本で夜の講義に参加できるところが売りで、人口減少に歯止めをかけるようなものではないが、新しい人が入ってきて地域も刺激を受けており、一定の成果が出ている。

・イノベーションラボで事業承継の例はない。やるなら第二創業だろう。ゼロからスタートするよりはよいと思うので、商工会と一緒に発掘していきたい。

・観光系の取組が目立っている。観光客は目的によって動きが分かれており、篠山城跡にバスで来る団体客は短時間の滞在。河原町などの重要伝統的建造物群保存地区はゆっくり回る観光客が多く、インバウンドも少しある。中心部以外では福住。バルをしたり、空き家をカフェにしたりする取組が盛んになっている。

・気分的に元気になっている感じはするが、秋などの観光シーズン以外の入込は芳しくなく、地域経済への波及もそれほどではないので、現状に甘んじていてはいけない。

（今後の方向性）

・農業生産の持続可能性と、暮らしを守るというところをしっかりやらないといけない。
・学区再編の影響で、市内の 2 つの高校の人気が落ちている。南部は三田に出てしまう。高校の時期の人格形成の影響は大きいので、ふるさと意識が消えていくのではないか。高校の規模も昔の半分になっている。高校がどうなるのかという心配がある。
・企業は人材不足で悩んでいる。市内の新卒者に求人をかけても地元の企業に就職する人は少ない。いい企業はたくさんあるのに選んでもらえない。
・買い物弱者対策が必要。公共交通を使えない人の生活をどうするか。移動販売に取り組もうとしている。社会福祉協議会と事業者と話をしているが、サービスを始めたとして本当に使ってもらえるのかどうか。
・今ある農村を維持していきたい。集約は考えておらず、今いるところで住み続けられる方法を考えている。実際すべてを維持できるかどうかは難しい。30 年後にはなくなっているところもあるだろう。
・自治会の運営も難しい。統合して役員の負担を減らしたり日役を手分けしたりもしているが、範囲が広くなって手間もかかる。合併しただけではうまくいかない。仕組みを変えないといけない。
・区長の負担を減らすために自治協議会というハコを作って 10 年が経つが、これも、これからずっと維持できるのかという話になっている。器を変えるだけでは限界がある。自分たちの意識を変えることも含めて、20 年後、30 年後まで地域をどう維持していくかを考えないといけない。
・篠山口駅と高速 IC のある味間地区だけ人口が伸びている。宅地があると人は来るが、民間の分譲地がもう駅前くらいしかない。商業機能も味間周辺に集まっている。
・30 年ほど前に整備された篠山口駅近くの高台の戸建ての団地は、高齢化が進み、住民の足の確保が問題になってきている。
・神戸大学との連携を始めて 15 年ほどになる。市内のまちづくり協議会ごとに学生が 1 年間の実習に入り、地域の手伝いなどをする。その人たちが作ったクラブの一つ「にしき恋」は、現在メンバーが 150 人ほどいて、活発に活動している。
・市からは県民局と一緒に学生団体に対して交通費の補助をしており、神戸大学以外の大学も地域に入ってきている。学生が来ると地域も刺激を受ける。そこから就農した人や市役所に就職した人も出ている。

＜丹波市＞

（人口の動き）

・出生数が減少。年 500 人程度の水準が、直近では 400 人くらいまで落ち込んでいる。下げ止まっていない。社会減も概ね 300 人の転出超過が続いている。
・丹波市には高等教育機関がほぼないので若者がいったん転出するのは仕方ないが、その後の戻りが弱いのを何とかしないといけない。男性は比較的戻ってくるが、女性がほぼ戻ってこない。
・全県に比べると第二子の生まれる割合が高い。結婚して第一子が生まれると第二子、第三市とつながっていきやすいのが本市の特徴。
・転出先は大阪や神戸といった都市部が多い。丹波篠山や福知山への移動も多い。福知山市は若者が一旦京都市などに転出しても、その後かなり戻ってくると聞く。福知山市の出生率も 1.88 と高い。
・女性は阪神圏、または東京圏の仕事に興味がある。福知山、三田、西脇などの工業団地に就職する男性は多いが、女性は工業団地の仕事に魅力を感じていない。
・市内の動きとしては、周辺部から中心部の交通利便性が高い地区へ流れている。市内の 25 自治協議会で人口が増えているのは石生（ｲｿｳ）地区で、若い世代の住宅が増加。
・目立った動きではないが、企業で働いている外国人が少しずつ増えている。主に中国人・ベトナム人。7～8 年前まで 600 人台だったが、現在 900 人くらいになっている。

（総合計画・創生戦略の状況）

・前回の戦略で 2060 年の目標人口を 5 万人としていたが達成困難である。直近の状況を反映し 4 万 1 千人に下方修正した。出生率を人口置換水準まで高め、進学・就職による社会減の 75%が回復することで達成できる人口規模である。
・出生率が低下傾向にある。次の世代が育たないと、人口は維持できない。社会増ばかり狙っていても、地域の担い手不足は解消されない。

（まちづくりビジョンについて）

・総合計画、創生戦略とは別に、独自に「まちづくりビジョン」を作成した。人口減少、少子高齢化が進む中で、旧 6 町の都市構造をどう考えるのか、どうすれば住みよいまちになるのかを示すもの。人口減少対策のハード面を担うビジョンという位置づけ。
・このビジョンとペアになるのが、小学校区ごとの自治機能のあり方。自治組織の再編、見直しが必要。地域にどういう自治機能を持たせるのか、行政との役割分担をどうするか、自治協議会を持続可能なものにするためにどうすればよいか、どんな支援が必要かといったことを今議論している。
・ビジョンで描く 20 年後の未来像は、市の中心部に都市機能の一定の集積を進めつつ、各地域が都市機能を分担し、住み慣れた地域で住み続けられるデザインとした。
・氷上、春日、柏原の市街地を結ぶエリアを中心部とし、周辺に 3 つの区域を設定して、それぞれに生活関連サービスの集積ゾーンを設ける方向性を示している。
・現在の分庁舎方式が非効率なので、将来的には中心部に統合庁舎を設置する方向を示しつつ、周辺部が不便にならないよう各地域に窓口は残すこととしている。

・公共交通、行政機能、地域自治など、将来のあるべき姿を整理したもので、今後はこれに基づき関連の計画を策定し、施策を推進するという方向に持っていきたい。
・このビジョンは本市独自のもので、他の自治体に同様のものはない。立地適正化計画であれば、居住誘導が付いてくるが、ビジョンはそういうものではない。コンパクトシティを目指すものでもない。

（今後の方向性）
・まちづくりビジョンをどう具現化するかが難しいところ。市だけではできないので、県の新ビジョンには期待している。これまでも、丹波の森構想に基づく現行ビジョン「丹波の森づくり」が後ろ盾となってきた。新ビジョンも、本市のまちづくりビジョンの後ろ盾となるようなものになってほしい。
・女性が戻ってこない理由は魅力的な仕事がないこと。男性と異なり女性が重視する仕事は「子育てとの両立」「時間の制約にとらわれない」「キャリアを生かした起業」といったもの。中山間地域の産業構造では対応が難しい。実際にそういう仕事はあるのかもしれないが、マッチングがされていない。
・男性の主な仕事は、兼業農家で製造業に携わっている人が多い。製造現場に女性は入りづらい。女性は総じてクリエイティブで、男性より起業意識が高い。
・小規模集落は増えているが、無人化まではいっていない。自治会単位よりも、小学校区と自治会をつないで、どういう地域を目指すかが大事だと考えている。
・市島への移住者が多いと言われるが、Ｉターンは今や全地域に入っており、市島に限られない。昨年のＩターンは把握しているだけで 52 組。その前年は 29 組。市の窓口を通しているだけでこれだけあるので、本当はもっとあると思う。
・就農以外にもいろいろな働き方で移住している。生活利便性ではなく、人に出会えたとか好きなものがあったとか、丹波の素材が気に入って移住しているということだろう。利便性では都市部が有利なので、やはりストーリーが重要だ。
・丹波市の移住相談の窓口は若い人でやっている。相談員はみんなＩターンかＵターンの人だ。相談員が若いと、若い人の移住につながりやすいようだ。

＜洲本市＞

（人口の動き）

・年間出生数 300 人、死亡数 600 人で 300 人の自然減、転入 1,200～1,300 人、転出 1,600 人で 300 人の社会減、計 600 人の人口減少が近年の状況。上下はあるが、合併以降この状況が続いており、この減り幅をどう抑えるかが課題。

・特に顕著なのが中心市街地の人口減少・高齢化。商店街の寂れ具合に拍車がかかっている。商店街衰退の主な要因は、大型量販店の進出。

・中心市街地の人口減少の主な要因は、高齢世帯の死去と子世帯との同居のための転出。島内唯一の DID がある洲本市街地の半径 1km 圏に市人口 4 万人の半分が住んでいるが、そこの減少が一番著しい。

・淡路市の社会増減がほぼゼロで推移しており、次の国調で当市を抜くだろう。この差は「位置」の違い。淡路市なら大阪・神戸への通勤が容易。旧東浦で特に増えているのはそのため。当市から旧東浦へ転居する人も多い。

・観光客にしても、京阪神の日帰り圏にある淡路市は年 1,000 万人だが、当市は 50～60 万人を行ったり来たりの状況。

・市内への通勤通学が減少。昼夜間人口比率は現在 110%程度で、年 1%ずつ減っている。

・小規模集落は現在 17 箇所。南部の灘、竹原、五色の山側などに多い。

（外国人の状況）

・外国人住民は現在約 330 人で近年増加傾向。20 代、30 代が増えている。増加の目立つ小路谷（ｵﾛﾀﾞﾆ）、安乎（ｱｲｶﾞ）はホテル、五色町鮎原（ｱｲﾊﾗ）はミサキ電機に勤めている人が集住しているため。介護や農業の現場にはまだあまり入っていない。

・住民とのトラブルなどは聞かない。小路谷も五色も企業が用意した寮や賃貸住宅に居住しており、会社側のフォローができている。ただ国民健康保険料と住民税を滞納したまま帰国する人がおり、滞納額が少しずつ積み上がっている。

（総合計画・創生戦略の状況）

・仕事がないと定住は進まない。そこから組み立てていかないと次の展開が難しいというのがこの 4 年間の取組の結論。20 代、30 代の若い移住者の仕事は ICT 系や調理師等の免許関連が多く、サラリーマンは少ない。サラリーマンの仕事があれば来てくれるが、それを期待するのは難しい。

・情報発信が足りない。そもそも知られていないので、人が来ない。旅行に来て、試しに住み、そこから定住につながるという話だと思うが、そもそも知らなければそういった流れにもならない。

・洲本温泉はあるが、それ以外の観光コンテンツが乏しい。淡路市、南あわじ市の間で埋没している。お城、歴史、街歩きと体験をパッケージ化してインパクトを高める工夫をしていく必要がある。

・中心市街地が空き家ばかり。既存不適格でそのままでは売れない建物が 2 千件はあり、うち 1/4 は危険空き家。この空き家をどうしていくかが今後大きな課題

・I ターン移住者は年間 100 人超。割合としては農業を希望する人が多く、五色が多い。

農業では「親方制度」として3年程度で地域に溶け込んでもらえるような仕組みで取り組んでいる。支援施設も五色にあり、無償で泊まれる施設もある。

・仕事は何でもいいという人は洲本市街が多く、古民家・空き家を改修して飲食店を開く人が多い。ただ1年経ってどれだけ残っているのかという問題もある。

・人口減少が進むと消滅する地域も出てくるだろう。地域おこし協力隊や大学と連携して若者を呼び込む取組をしており、少しずつ広がりを見せている。そうやってきて来てくれている人を大事にして、人が減っても楽しい地域を創っていきたい。

（今後の方向性）

・移動手段を確保する必要がある。自動運転には期待するが到来まで待てない。民営バス路線に代えてコミュニティバスを走らせる。この10月から市域を越えて運行している。市域越えのバスを増やしきたい。バス会社に対する赤字補填補助をやめて、利用者の乗車運賃の半額助成を青天井で始めたところ、利用者が増えている。

・シャッター街の再生などにより、交通手段を使わなくても生活できる街づくりもやらないと街の将来像が描けない。シャッター街の再生、歩いて移動できる環境の整備、買い物支援などを組み合わせてやっていかないといけない。

・賑わいづくりなど民間主導の活性化も当然あってよいが、それが島外の事業者で、地元にお金が落ちないような形では意味がない。地域の中でお金が循環する仕掛けづくりに地道に取り組んでいくことが大事だと思う。

・学力重視の教育ばかり頑張ると、島の人口を減らすことになる。大学に行かずに高校を出て地元で仕事をしていく人を育てる道筋も大切にしないといけない。

・仕事が必要だが、誰もが起業できるわけではない。伝統工芸を含む既存の自営業者が大量に廃業しているので、現役の間に次代にバトンタッチできるよう跡継ぎのマッチングができればよいのだが。

＜南あわじ市＞

（人口の動き）

・人口は、社人研推計から更に下振れしている。生産年齢人口の女性が激減し、出生数が減少。多子世帯を増やす施策に力を入れてきて、第1子対策が出遅れた形。
・転出、転入ともに増加しており、50歳以上のリタイア組の転入増が目立つ。島外に出てしまう若い世代にいずれは戻ってきてほしいという思いで、小学校から淡路人形浄瑠璃を使った郷土学習に取り組んでいる。
・転入者は利便性を見て場所を決めている。津波の浸水エリアに来る人はまずいない。
・転出先は徳島より神戸が多い。若年層の転出超過幅がこの5年で減少傾向。200万円のマイホーム補助金、2015年度に始めた2人目以降の保育料無料化の効果で夫婦のどちらかが南あわじ市出身というUターンが増えている。

（外国人の状況）

・外国人労働者が増加傾向。職種では玉ねぎの皮むき、カット野菜の出荷など農業関連が多い。技能実習で約230人が市内に居住している。技能実習を斡旋する組合が市内にある。国別ではベトナム人が多い。介護施設やホテルにも少しずつ入り始めている。
・外国人労働者は集合住宅に住んでおり、表面化はしていないが、周辺の住民が不安を持っているという声は聞いている。治安が悪くなっているということではないが。
・斡旋している組合がついているので民業任せの状態。防災面でいざという時に外国人をきちんと案内できるのか、危機管理部門が頭を悩ませている。

（総合計画・創生戦略の状況）

・国の方針に沿った創生戦略があるが、現市長になってから教育に力を注いでいる。「学ぶ楽しさ日本一」を掲げて教職員も含めて楽しい学校を作る取組を進めている。
・重視しているのは、詰め込み型の教育ではなく、入手した情報を人に伝える「表現力」と淡路育ちとしての「誇り」。農家の親も、子どもには勉強してサラリーマンになれと言ってきたが、これからはそうではない。南あわじの農業は生産性の高い「稼ぐ」農業だ。そこを強調して、いずれは帰ってこいと胸を張って言えるようにしたい。
・市内唯一の高校、三原高校の定員が削減傾向にあるので、地域でコンソーシアムを組んで三原高校の魅力を上げる取組を進めている。その一つが人形浄瑠璃であり、次にはスポーツで特色づくりをしていきたい。
・アフタースクールにも力を入れている。放課後子ども教室と学童保育を一体化し、サッカー、プログラミング、ドローン体験、地域住民が講師を務める文化学習ほか、貴重な体験ができる場づくりを進めている。ただ、財源が厳しい。文科省の補助金が取れず、一般財源が膨らんでいる。全校でやると一般財源で1億5千万円必要になる。
・観光交通の強化が必要。車に依存しない交通網を整備し、インバウンドが公共交通で島内を巡れるようにしたい。観光も交通も島全体で一つの枠組みでやらないといけない。
・ただ、更なる合併が必要とは考えていない。分野ごとに一つにした方が効率的な業務を一つにしていくという話だろう。
・小規模集落は、灘、沼島、丸山、旧南淡の山間部など。自治会活動ができず、公共施設

の清掃や草刈りもままならない。耕作放棄地は3年放っておくと雑木林、藪に戻る。
・元気な高齢者が多いが、就業率は40%程度。半数以上が働いていない。高齢者活躍推進事業を立ち上げてボランティアも含めて20時間以上の就労を進めている。

（今後の方向性）
・人が減るのは仕方ない。食い止めるのは無理。だからといって見ているだけではだめ。何かしらのアクションを起こさないといけない。それは行政だけではできない。いかにして地域の人と一緒にやっていくか。住民と一緒になって汗をかく姿勢が大事。
・UターンもＩターンも就農希望者が多い。Uターンの場合は、大抵家に農機具があり、就農しても自立しやすい。Ｉターンの場合は、親方農家の下で自立を目指すが、なかなか続かないし、余っている農地は条件の良くない耕作放棄田が多い。結果としてUターンの方が定着しやすいので、近年はUターン向けの施策に舵を切っている。Ｉターンは有機や無農薬をやりたい人が多く、周りから歓迎されないということもある。
・お産を取り扱う病院が市内にない。安心して子育てできるということを目指している割には産む場所がないと言われる。
・有効求人倍率は高いが、高校生たちは「仕事がない」という。仕事はあっても魅力がない、やりたい仕事がないという先入観がある。しかし、探せば面白い仕事はある。淡路島にこんなに働く場所があるということを中高生に知ってもらうことが大切。
・人口が減った時に何が困るのかというのが実は誰も見えていない。
・限界集落になっていくのは仕方がない。その段階でどうしていくかを考えるしかない。自分たちの地域は自分たちで守る。これが基本で、行政はそれを支援する。そうでないと机上の空論になってしまう。

＜淡路市＞

（人口の動き）

・社会増減は改善しているが、出生数が減少している。一昨年の 290 人から昨年は 210 人と急減した。これは県立病院における里帰り出産の受入停止の影響ではないか。
・市内の唯一の産科である、聖隷淡路病院の産科がこの 12 月で受入終了する。なんとか代わりの産科医を探そうとしたがダメだった。若年世帯の移住が増えてきている中で、これは大きな痛手だ。
・移住者は少しずつ増えている。定年を迎えた人の U ターンに加え、I ターンも結構来ている。I ターンに人気なのが旧東浦。交流人口は西浦が多い。西日のきつい西浦が、今はサンセットで人気だ。
・移住者の仕事は農業が多いが、来てから探す人もいる。夢舞台に仕事があるし、企業誘致の動きもある。阪神間に通勤する人もいる。神戸市、芦屋市と一緒にやってきた移住事業の成果が出始めている。しかし、それ以上に学区再編で若者が外に出て行く。
・一般住民の転出先は神戸市が多い。次いで大阪府だが、全体では県内が多い。
・市内の人口の動きは、西浦（瀬戸内海側）が減少し、東浦（大阪湾側）が伸びている。合併以降で増えているのは、旧東浦町域のみ。
・市内の外国人は微増傾向にある。仁井小学校跡にできた日本語学校「グローバルアカデミー」にはベトナム人が多い。パソナグループが一宮中学校跡に開設した「AYF （Awaji Youth Federation)」にはヨーロッパ、アメリカはじめ様々な国から人が来ている。
・パソナグループが運営する「ニジゲンノモリ」のダンスメンバーとして技能労働者の枠で入ってきている外国人もいる。
・AYF は日本の文化を学んで自国に帰る人が多いが、国内で起業する人もいる。

（総合計画・創生戦略の状況）

・2015 年度の学区再編が決定的。これで学生の動きが変わった。学区再編で洲本向きの子が神戸向きになり、高校段階で島外に出る子が増えた。学区再編は時代の流れで仕方ないし、子どもの可能性を引き出すものだが、田舎町にとっては痛かった。
・市内の 2 つの高校の立て直しをやっている。統廃合の渦に飲み込まれないように頑張って生徒を確保しないといけない。淡路高校はコミュニティバスを配置したが、津名高校は今のところ手立てがない。同等の学校が対岸にあるので、選択肢としての存在感が薄くなっている。私立の蒼開（旧柳学園）はもっと厳しい状況と聞いている。
・淡路島の大きな課題が二次交通の脆弱性。対応の出遅れが響いている。現在高校生への通学費助成はないが、大学生は上限 5 万円まで助成している。二次交通はやりようによってもっと利用者を増やせるはず。
・関西看護医療大学、総合リハビリテーション専門学校の学生は地元に定着しない。遠方の学生は市内に住んでくれるが通いが多く、学生専用の送迎バスで舞子まで届けている。
・出生率の低下を止めないと若者がいなくなる。南あわじ市の農業のような底力がうちにはなく、どこかに就業して収入を得る形を取らないと定住するのは難しい。
・事業所誘致では、夢舞台周辺で動きがあり、小学校の空き校舎の活用についても近々目

処が立ちそうだ。残っているのが津名の企業庁用地。
・廃校の活用は順調に進んでおり、来年からは佐野小も地域で活用することに決定。視察の受け入れができるような良い事例になると思う。

（今後の方向性）
・地元企業で働く人の確保が課題。事業者は頑張っているが人がいない。
・淡路島全体で年間の交流人口が 1,300 万人ある。たいてい市内に立ち寄るわけで、この交流人口の増加を定住人口の確保につなげないといけない。
・定住者が増えないと、出生率も上がらない。「いつかきっと帰りたくなる街」を掲げて、関連の施策を丁寧に展開していくしかない。阪神間に一番近い位置にあるので、可能性はあるはずだ。
・大学との連携も更に進めたい。大正大学と包括連携を締結した。地域実習として学生の受入れをする中で、島内に定着する人が一人でも出ればという思いでやっている。
・地元企業で働く人を増やすことが第一の課題だが、住宅都市を目指すという方向性も考えられる。地域に分散するいろいろな資源や、東浦と西浦それぞれの地域性といった地理的特性を生かす将来展望として、働く場所は島外でも住む場所は島内という方向の可能性はある。
・JC が 3 市合併の旗を振っているが、更なる合併には今のところ意味を見出しにくい。定住自立圏の中心市は洲本市だが、淡路市は神戸方面、南あわじ市は四国方面と生活圏域が異なっていることもあり、3 市が 1 市にまとまる必要性が乏しい。